

館林藩
秋元家の江戸屋敷②



令和元年11月7日

須永清 (館林文化史談会)

『江戸勝景 日比谷外之図』 (安藤広重)

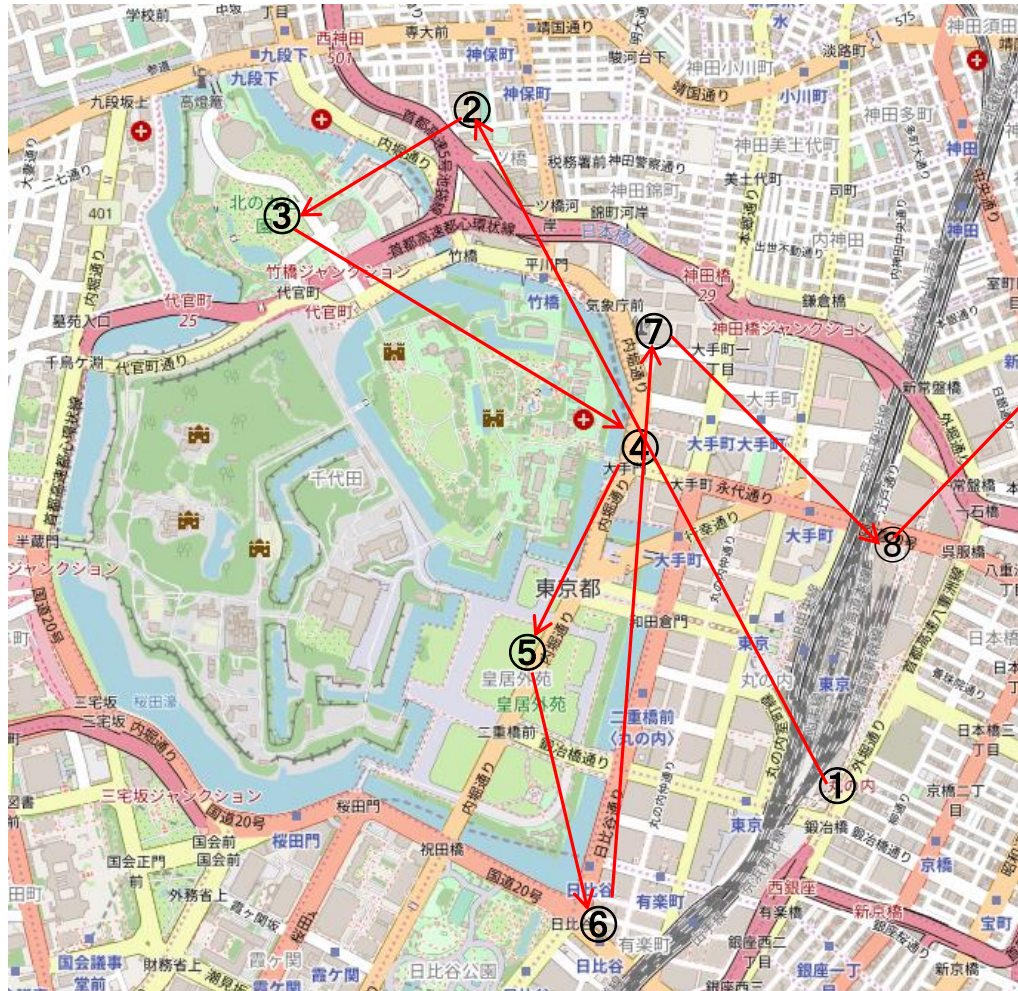
復習です！ 大名の江戸屋敷

将軍から拝領 = 大名の私有物ではない

- ・ 上屋敷：藩主やその家族が住む公邸であり、藩主としての政務を行う
- ・ 中屋敷：隠居した藩主や嗣子の住いであり、上屋敷が罹災した場合の予備の邸宅
- ・ 下屋敷：藩主の休息用の別邸、国元からの回漕物資の荷揚げや蔵屋敷、藩士の住居など多面的

自前の屋敷 = 抱屋敷（用途は自由 = 下屋敷）年貢を払う

秋元家の江戸屋敷（上屋敷）の移転



© OpenStreetMap contributors

秋元家・上屋敷の移転（1）

旧屋敷	新屋敷	確認時期	藩主	備考
	後の鍛冶橋御門の辺り	(慶長12年) (1607)	長朝	関ヶ原の戦いに関する恩賞で大名になり、 新しく屋敷を拝領 したと思われる。
後の鍛冶橋御門の辺り	一橋御門外	(寛永9年) (1632)	泰朝	谷村に転封する(寛永10年)直前で、東照宮造営の総奉行として造営に着手するのは寛永11年である。なお、寛永9年は秀忠が死去した年であり、本格的な家光の政治が行われ始めた年でもある。
一橋御門外	清水御門内	(正保元年) (1644)	泰朝	実は泰朝は2年前の寛永19年に死去している。絵図の発行年と内容には多少のずれがあると思われる。 家光の側近として東照宮の造営を成し遂げるなどの功績 もあり、 江戸城内堀の中の将軍一族も住むエリア に屋敷を拝領している。 明暦3年(1657)の絵図には「秋元越中」とあるので、富朝である。

秋元家・上屋敷の移転（2）

旧屋敷	新屋敷	移転時期	藩主	移転の理由など
清水御門内	大下馬後	天和2～3年 (1682～3)	喬知	幕閣（若年寄）に入ったことにより、若年寄を辞めた松平因幡守信興と屋敷を交換
大下馬後	和田倉御門内	宝永年間頃 (1704～ 1711)	喬知	老中交代による屋敷替え。辞任（死亡）した阿部豊後守正武跡へ移転。その跡へ本多伯耆守
和田倉御門内	日比谷御門内	正徳4～5年 (1714～5)	喬房	正徳4年に老中を務めていた喬知が死去したため、老中に復帰した阿部豊後守正喬に屋敷を譲り戸田能登守跡へ。戸田能登守は老中・山城守となり、一橋御門内に移転
日比谷御門内	神田橋御門内	延享4年 (1747)	涼朝	奏者番から西の丸老中に出世した時期。元老中格・松平右京太夫跡に移転
神田橋御門内	呉服橋御門内	明和4年 (1767)	涼朝	田沼意次と屋敷を交換（後述）
呉服橋御門内	浅草新寺町	元治2年 (1865)	礼朝	長州周旋に関わるお咎め（後述）

田沼意次屋敷との交換 神田橋から呉服橋へ

同じ時期に幕閣に列し、老中辞職、屋敷交換や山形転封などが重なる。

日付	西暦	秋元家の動向
延享4年9月	1747	涼朝西の丸老中を拝命。神田橋御門内上屋敷を拝領 (旧松平右京大夫屋敷)
宝暦8年9月28日	1758	田沼主殿頭意次、大名に列し呉服橋御門内に屋敷拝領
宝暦10年4月1日	1760	涼朝老中を拝命
宝暦14年3月24日	1764	涼朝老中職を辞す
明和2年	1765	涼朝西の丸老中を再度拝命
明和4年6月28日	1767	涼朝西の丸老中職を辞す
明和4年7月1日		田沼意次、側用人を拝命 (~明和9年)
明和4年8月15日		呉服橋御門内、田沼主殿頭意次上屋敷と屋敷替え
明和4年閏9月15日		秋元家、川越から山形へ転封
明和6年8月15日	1769	田沼意次、老中格。明和9年(1772)1月15日より 天明6年(1786)8月27日まで老中を務める

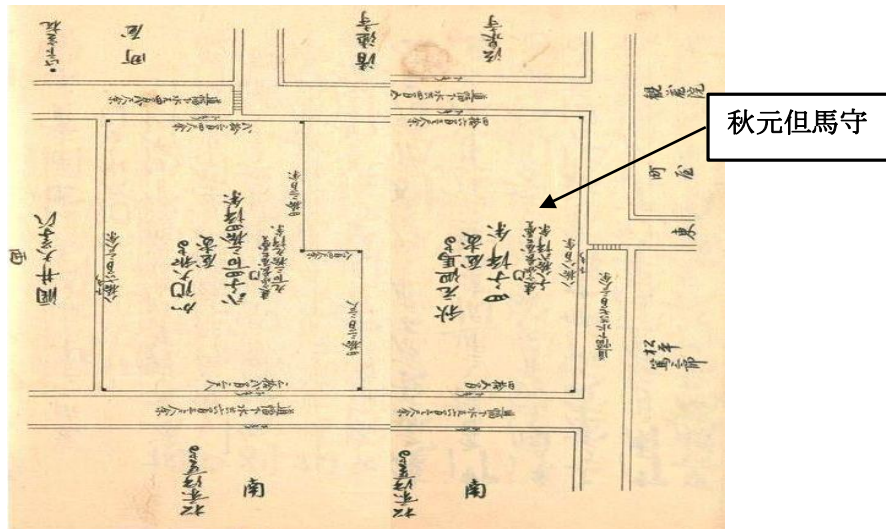
※ちなみに、秋元家が関東(館林)に戻ってくるのは、水野忠邦の失脚による。

長州周旋に関わるお咎め 呉服橋から浅草新寺町へ

日付	西暦	藩	出来事など
文久2年1月	1862	宇都宮藩	坂下門外の変が起こる。宇都宮藩は関与を疑われる
元治元年3月	1864	館林藩	この頃、長州周旋を行うが交渉不成立
元治元年3月27日		宇都宮藩	天狗党の乱起こる（宇都宮藩は藩内に同調者を出し、天狗党を鎮圧せずに藩内を通過させてしまう）
元治元年7月19日			禁門の変。長州征討の勅命→第一次幕長戦争へ
元治元年10月27日		館林藩	秋元志朝が隠居させられ、礼朝が家督相続
元治2年1月25日	1865	宇都宮藩	宇都宮藩、27000石余り減封し、5万石に。藩主は隠居して養子に家督相続
元治2年2月1日		宇都宮藩	浅草新寺町の戸田家上屋敷取り上げ。本所十間川の阿部主計頭の抱屋敷を借用し上屋敷を移転
元治2年3月1日		館林藩	志朝呉服橋御門内の上屋敷を差し上げ、浅草新寺町戸田越前守上屋敷を拝領。27日に引き渡し。呉服橋御門内屋敷は牧野備前守忠恭（ただゆき）（越後長岡藩主）が拝領

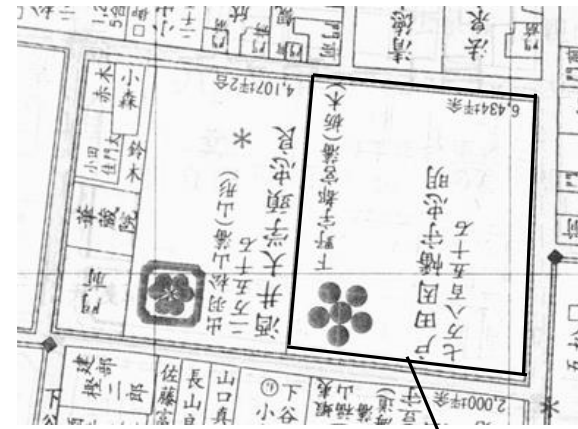
元治二七年三月廿七日
 秋元但馬守
 押田六三郎
 元治二七年三月廿七日
 秋元但馬守
 押田六三郎
 元治二七年三月廿七日
 秋元但馬守
 押田六三郎
 元治二七年三月廿七日
 秋元但馬守
 押田六三郎

元治2年（1865）3月27日、秋元但馬守は呉服橋門内の上屋敷を返上し、浅草新寺町戸田越前守上屋敷の内の四千坪を拝領



『屋敷渡預絵図証文 元治2年』より

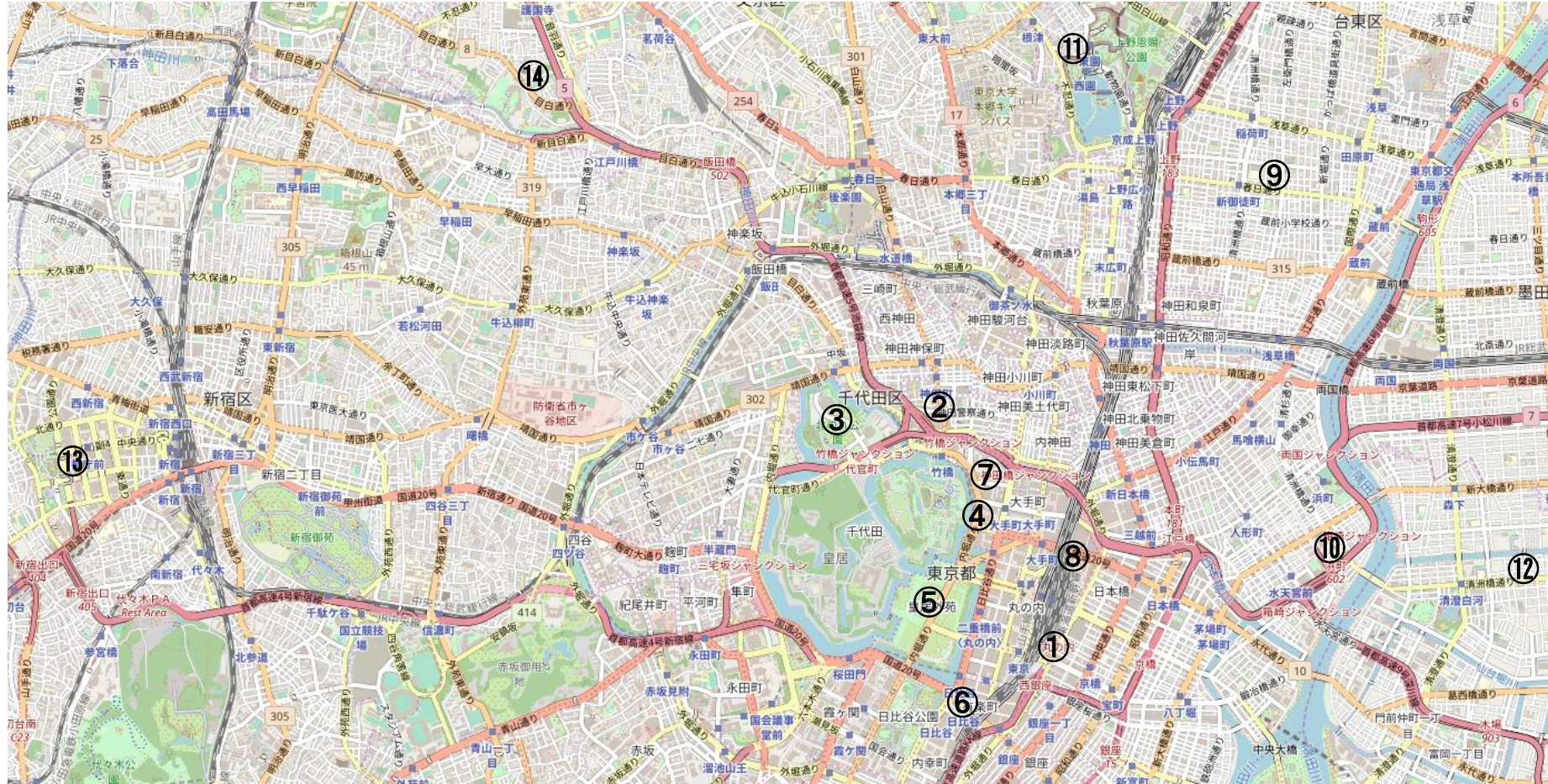
戸田因幡守は安政3年に死亡
弟の忠恕（ただゆき）が後を継ぎ越前守に任官



『復元・江戸情報地図』
(安政3年) (朝日新聞社)



秋元家の江戸屋敷



© OpenStreetMap contributors

上屋敷（1か所）

- ①後の鍛冶橋辺
- ②一橋御門外
- ③清水御門内
- ④大下馬後
- ⑤和田倉御門内
- ⑥日比谷御門内
- ⑦神田橋御門内
- ⑧呉服橋御門内
- ⑨浅草新寺町

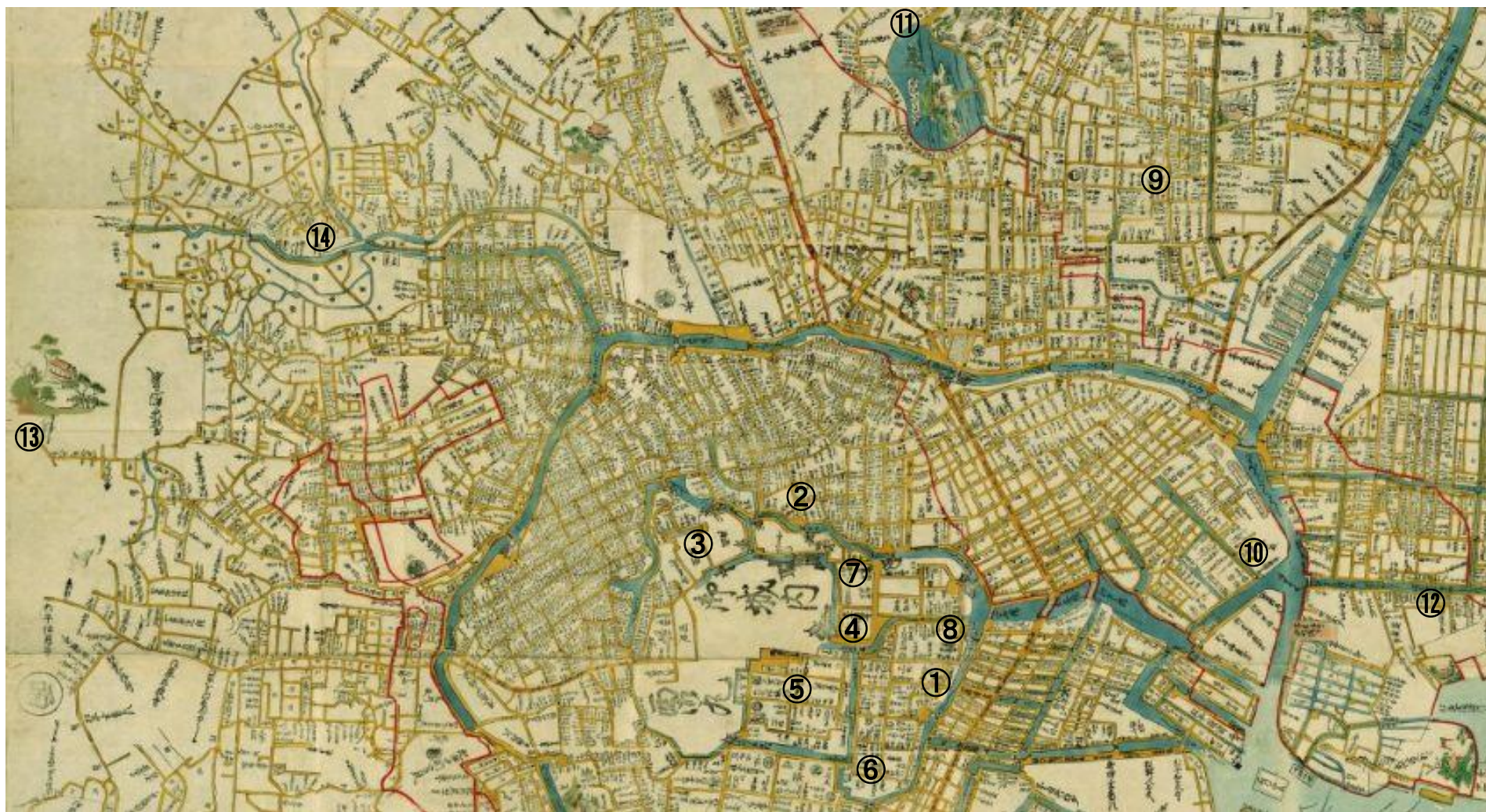
中屋敷（1か所）

- ⑩浜町

下屋敷（複数）

- ⑪池之端
- ⑫深川
- ⑬四ツ谷末角筈
- ⑭目白末関口？

秋元家の江戸屋敷



『増補江戸大絵図 絵入』 (天和2年・1682)

上屋敷 (1 か所)

- ①後の鍛冶橋辺
- ②一橋御門外
- ③清水御門内
- ④大下馬後
- ⑤和田倉御門内
- ⑥日比谷御門内
- ⑦神田橋御門内
- ⑧呉服橋御門内
- ⑨浅草新寺町

中屋敷 (1 か所)

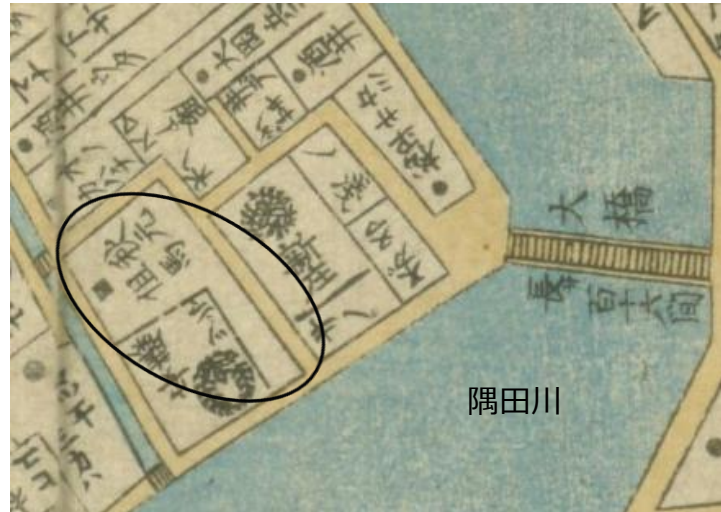
- ⑩浜町

下屋敷 (複数)

- ⑪池之端
- ⑫深川
- ⑬四ツ谷末角筈
- ⑭目白末関口?

秋元家の江戸屋敷（中屋敷・下屋敷）

『御江戸大絵図』安政5年（1858） ※右の2図も同じ



浜町の中屋敷

現在の明治座から清洲橋に向って400m程の場所。

寛文10年（1670）の絵図に秋元家の屋敷としての記載があり、古くからの屋敷である。江戸城からは3~4kmと上屋敷に次ぐ近さにある。



池之端の下屋敷

上野動物園西園の北側に位置する。元禄14年（1701）の絵図に記載がある。不忍池が目の前で東側は寛永寺と、政治というより休息の場に相応しい。



深川の下屋敷

小名木川に面し、左方に隅田川。船運の便が良く、領国からの年貢米や特産品を蓄える倉庫の建ち並ぶ蔵屋敷の役割りを果たしていたと考えられる。寛文11年（1671）の絵図にある。白河2丁目の辺り。

秋元家の江戸屋敷（下屋敷）

『御江戸大絵図』 安政 5 年（1858） ※右の図も同じ



この辺りが
現在の新宿駅



護国寺参道
北（上）に進むと護国寺に
着く

目白不動尊
（現在は別の場所）

神田川

角筈の下屋敷

現在の東京都庁からワシントンホテル
まで含む広大な敷地を持つ。

角筈はしばらく“江戸”の範囲外だった
ため、確認できた絵図は
宝暦元年（1751）のもの。

文政元年（1818）の「朱引」ではギリギリ江戸の範囲だが、町奉行の管轄外である。

関口の旧下屋敷？

宝永頃の「武鑑」に下屋敷として“目白末関口”の記載があるが、この時期の秋元屋敷は確認できていない。

ただし、後の時代に目白不動尊の近くに“秋元但馬”、“秋元小左工門”、“秋元忠右工門”などと記載された屋敷があり、拝領下屋敷を一族の住居としてそのまま使用した可能性がある。

椿山荘と道を挟んで向かい合う場所。

抱屋敷とは？

大名家が自分で所有権を取得した屋敷。抱屋敷所持は好ましからざるものとしてしばしば規制されたが数多く存在し、面積も広大なものが多い。

『復元・江戸情報地図』（安政3年）（朝日新聞社）下記の数値も同じ



池之端の屋敷は「下ヤシキ」と「下屋敷続 抱ヤシキ」からなる。すなわち、片方は拝領屋敷で他方は自前の抱屋敷である。



秋元家と明記はないが、角筈の下屋敷の形と全く同じ形で抱屋敷とされている。

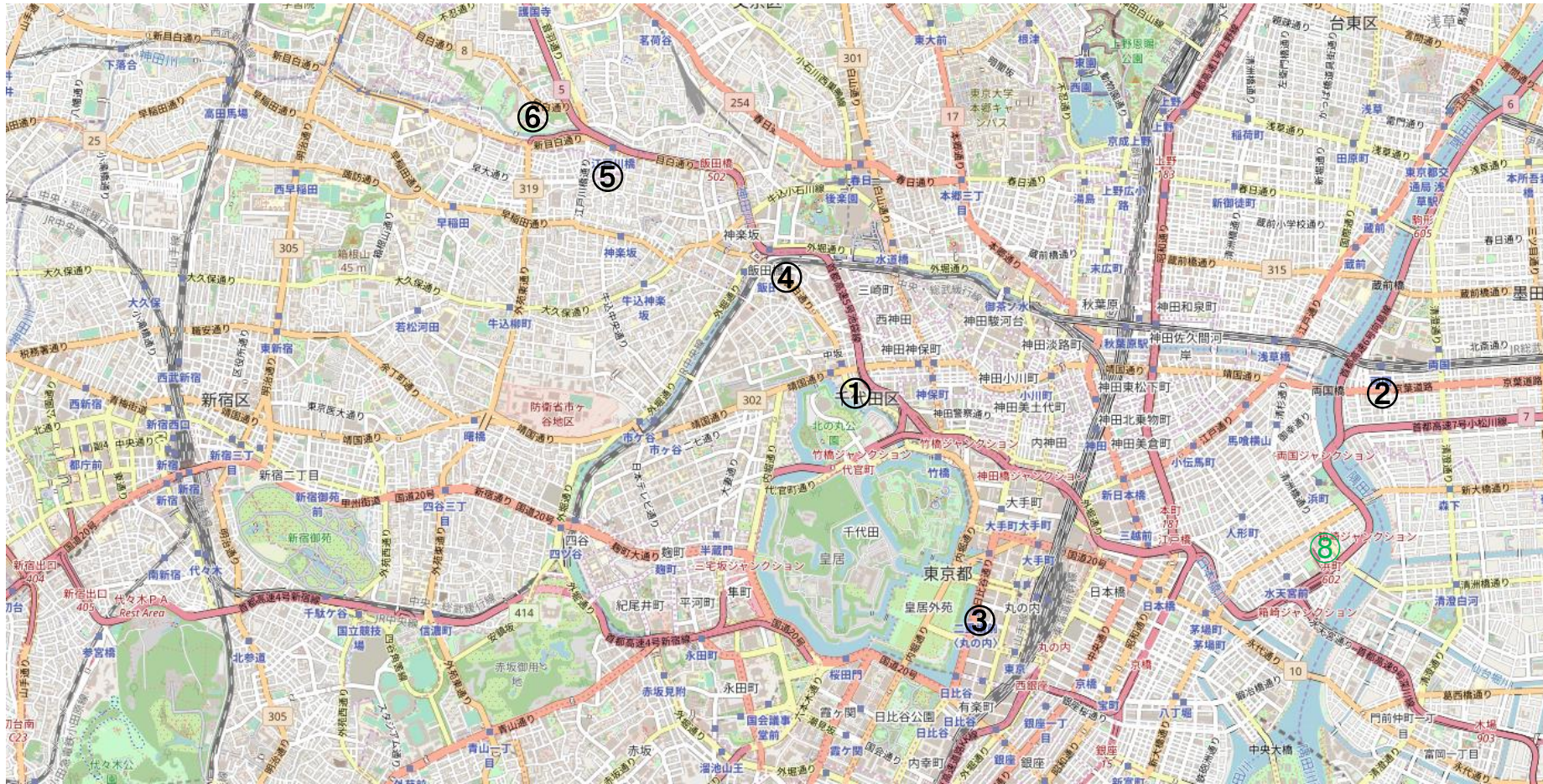
※両図ともに『江戸絵図』より（時期不明）

安政3年の江戸屋敷の面積

屋敷名	拝領屋敷	抱屋敷
呉服橋	4,000	
浜町	7,547	
池之端	1,900	3,027
深川		6,443
角筈		27,026
合計	13,447	36,496

※池之端の抱屋敷の広さは、正確には3,027坪9合

秋元一族の屋敷

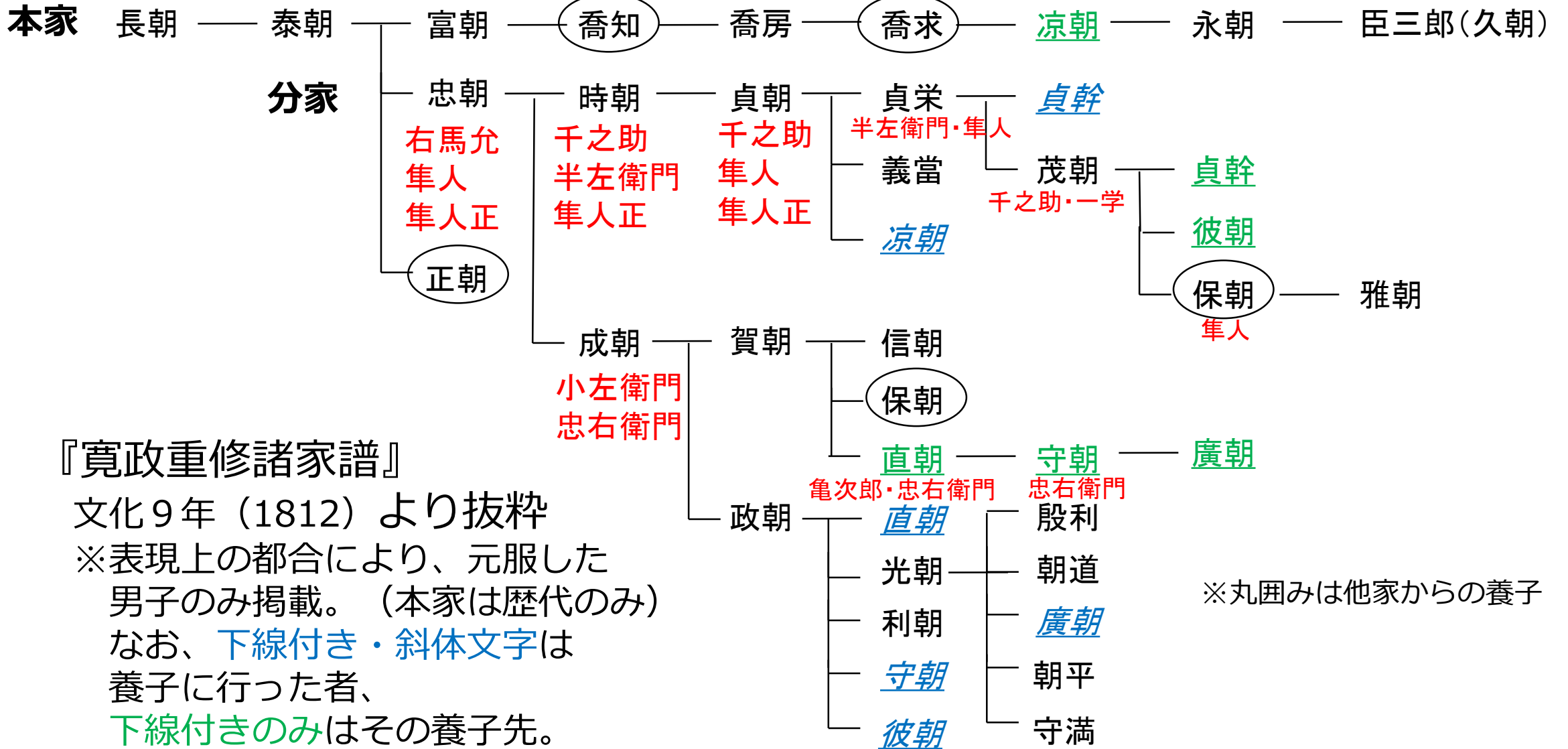


© OpenStreetMap contributors

- ① 清水御門外
秋元隼人
- ② 本所回向院後
秋元隼人
- ③ やよすかし
(八重洲河岸)
秋元隼人
- ④ 飯田町二合半坂
秋元右近
秋元隼人
- ⑤ 小日向・改代町
秋元小左衛門
- ⑥ 目白先関口
秋元亀次郎
秋元忠右衛門

秋元家 分家家系図

(略図・寛政期まで)



※丸囲みは他家からの養子

秋元一族の屋敷 (秋元隼人家)

時朝 清水御門外



貞享4年(1687)清水御門外に秋元隼人。3代富朝弟の忠朝の子の時朝の家系は隼人や隼人正を名乗っている。堀を挟み北の丸。秋元家の上屋敷は大下馬後に移転しており、藩主は喬知。

『参入江戸大絵図』

貞朝 本所回向院後



享保3年(1718)隅田川を両国橋で渡った回向院の近くに秋元隼人。貞朝は元禄9年(1696)に職を免じられて小普請となる。咎は元禄13年に許される。享保4年(1719)の武鑑では八重洲河岸に移っている。

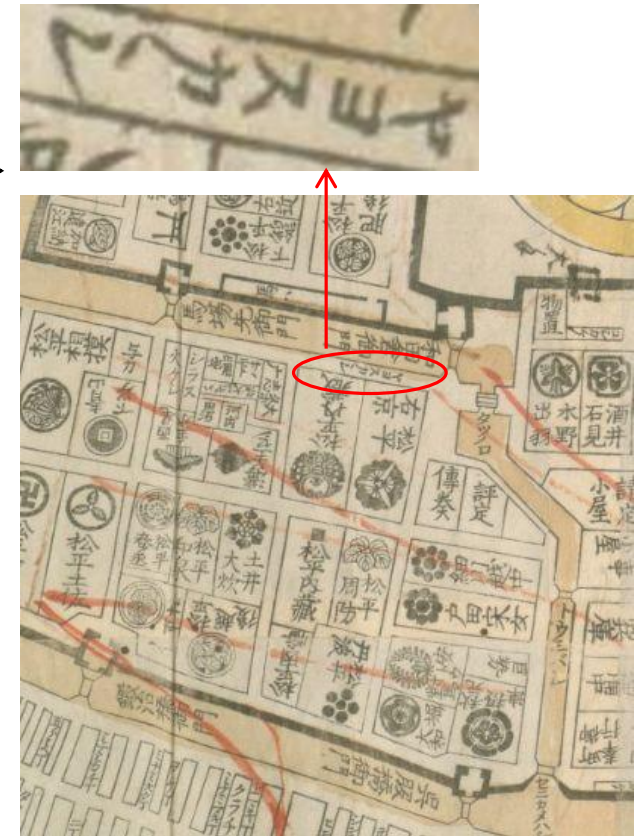
『分間江戸大絵図』

茂朝 八重洲河岸



宝暦13年(1763)馬場先門の外に秋元隼人。享保6年(1721)から明和6年(1769)までの古地図に屋敷がある。地下鉄二重橋前駅辺り。なお、堀の向かいには老中・館林藩主・松平右近将監(武元)の屋敷

『分間江戸大絵図』

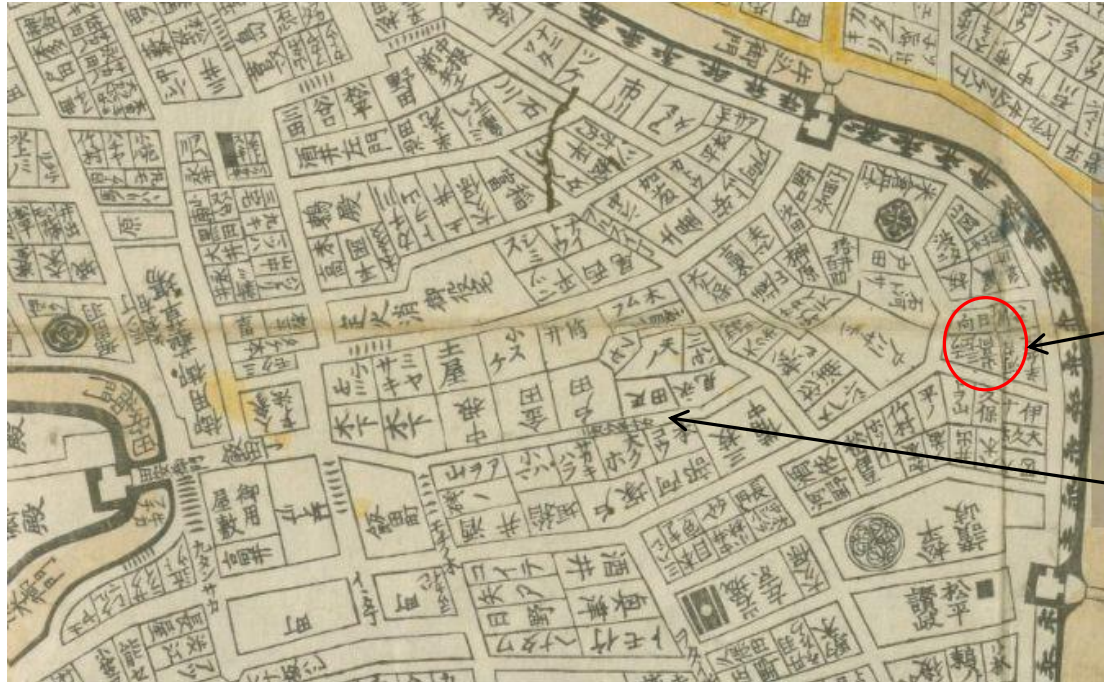


ヤヨスカシ=八重洲河岸 オランダ人のヤン・ヨーステンの住居があったので名付けられた。今は東京駅西側の丸の内であり、現代の八重洲は東京駅の東側の地名。(左下の橋の辺り)

『分間江戸大絵図』明和9年

秋元一族の屋敷（秋元隼人家）

茂朝 明和8年（1771）定火消になる！



後の飯田町屋敷

二合半坂

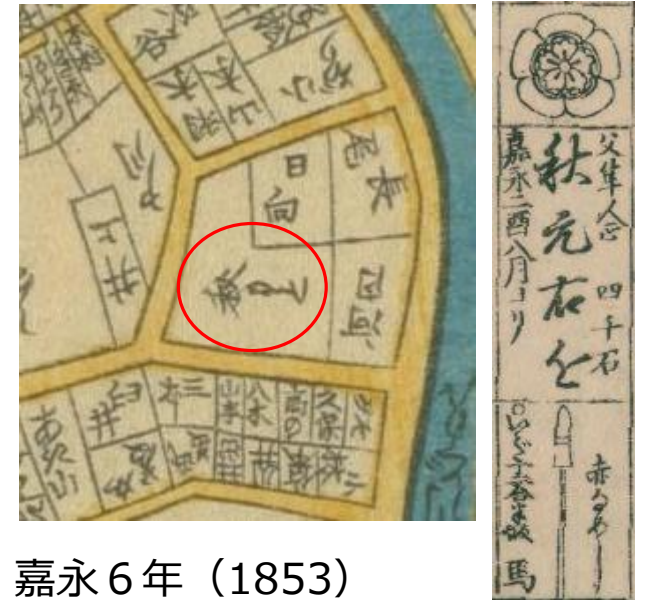
前ページ・八重洲河岸の屋敷隣も定火消の役宅であったが、宝暦13年（1763）時点では寄合（無役）であった。明和8年（1771）に定火消になったが、安永3年（1774）の住まいは飯田町に変わっている。上の絵図は飯田町の定火消の役宅であり、後の飯田町の屋敷とは別の場所である。

『分間江戸大絵図』

秋元一学（茂朝）が定火消時代の武鑑（安永3年・1774）秋元家の家紋の一つである源氏車の纏である。



昭朝 飯田町二合半坂



嘉永6年（1853）秋元隼人（保朝）、秋元右近（昭朝）と書かれた絵図もある。武鑑には安永3年（1774）初出だが、弘化3年（1846）～慶応3年（1867）の絵図にも記載がある。同じ場所かは不明。今の飯田橋駅の東・東京区政会館がある場所

『宝永御江戸絵図』

秋元一族の屋敷（秋元忠右衛門家）

成朝 小日向・改代町



天和3年（1683）
秋元小左（小左衛門の略）とあり、関口屋敷の忠右衛門と同じ家系。場所も極めて近い。絵図資料では時期の重なりもあるが、こちらは江戸前期が中心。
[東京メトロ・江戸川橋駅の南の改代町辺り。](#)

『増補江戸大絵図亥正月改御紋入』

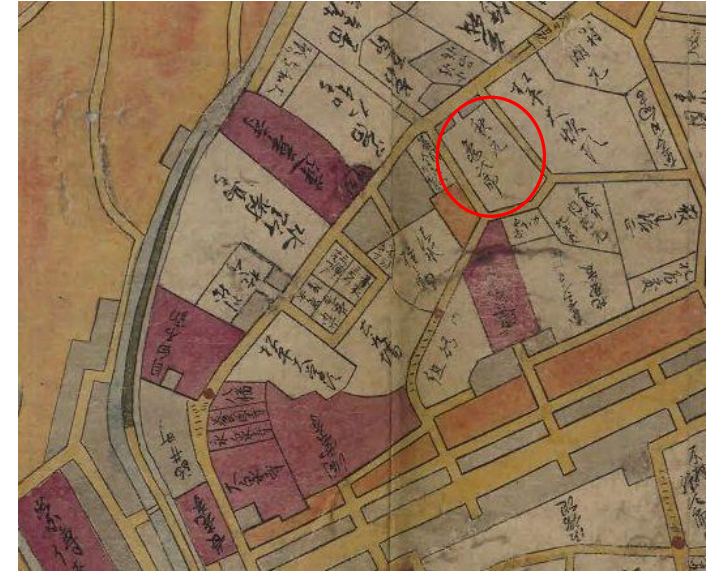
賀朝 目白先関口



享保8年（1723）
成朝は天保5年に致仕し、子の賀朝が御書院番を務めている。ただし、賀朝は小左衛門を名乗っておらず、上図でも後に書き加えられたような感じで他と筆跡が異なる。（同じ絵図に小日向の屋敷も記載されている。）
[椿山荘と道を挟んで向かい合う場所。](#)

『分間江戸大絵図』

直朝（亀次郎） 目白先関口



延享-宝暦頃（宝暦8年（1758）以降）
亀次郎は後に忠右衛門を名乗る。屋敷は左図・享保8年と同じ場所であるが、より正確な場所が分かる。安政3年（1856）資料でも同じ場所にあり、“御書院番 秋元忠右衛門 千石”とある。

『設彩江戸大絵図』

弘化2年転封以前の秋元家と邑楽郡の結びつき

秋元家系図（時朝・部分）

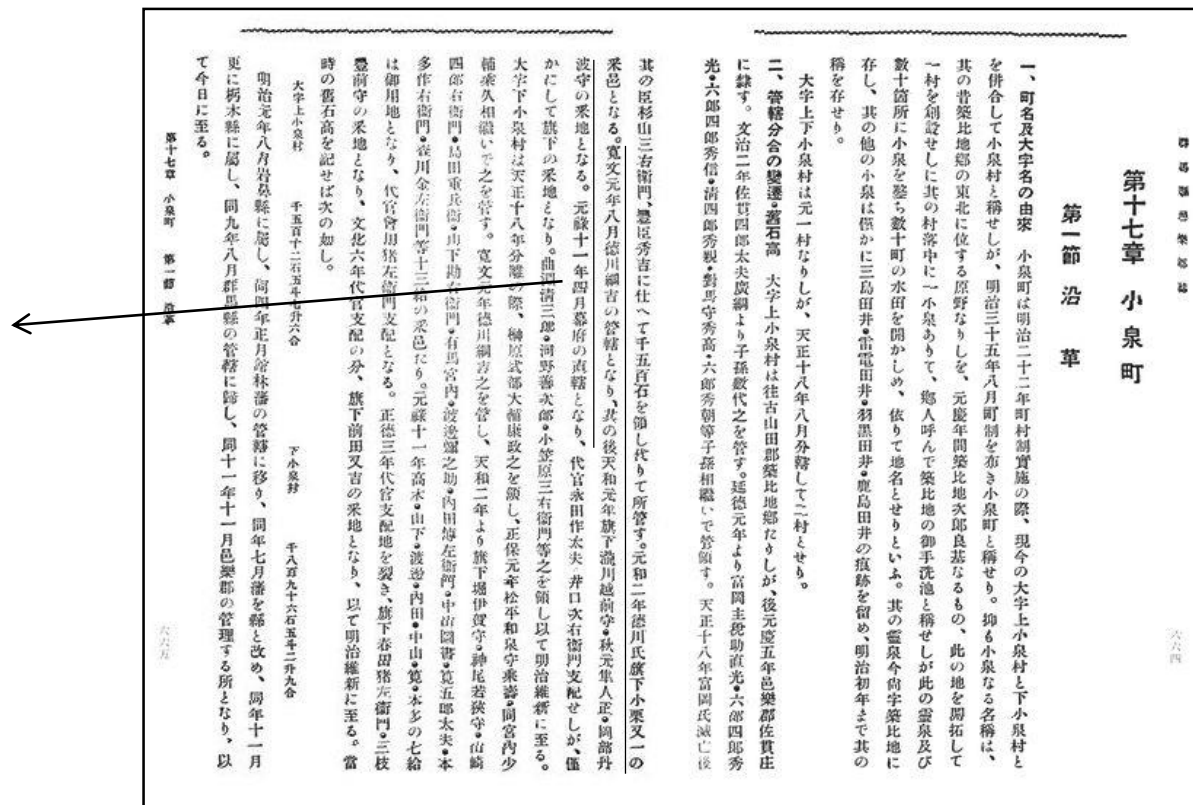
寛文元年八月徳川綱吉の管轄となり、其の後天和元年旗
 下瀧川越前守、**秋元隼人正**・岡部丹波守の采地となる。元禄
 十一年四月幕府の管轄となり、（以下略）

六日布衣を着する事をゆるさる。天和
 元年五月二十六日御小性組の番頭に轉
 じ、十二月二十七日從五位下**隼人正**に
 叙任す。二年四月二十一日上野國邑楽、
 下野國足利兩郡のうちにして千石の地
 をくはへたまひ、すべて四千石を知行
 す。六月三日御書院の番頭に遷り、貞

『寛政重修諸家譜卷第九百五十八』
 （続群書類従完成会）

秋元時朝（正保4年（1647）-貞享4年（1687））
 孫四郎 千之助 半左衛門 隼人
隼人正 從五位下
 父は秋元泰朝・次男の忠朝
 母は松平伊豆守信綱の娘

寛文元年八月徳川綱吉の管轄となり、其の後天和元年旗
 下瀧川越前守、**秋元隼人正**・岡部丹波守の采地となる。元禄
 十一年四月幕府の管轄となり、（以下略）



『群馬県誌（復刻版）』（千秋社）

※『邑楽郡誌』は天和元年、『寛政重修諸家譜』では
 天和2年（1682）と記載が異なる。
 しかし、『寛政重修諸家譜』における瀧川越前守
 （利錦・としかね）、岡部丹波守（勝政）の家譜にも
 天和2年とあるので、その可能性が高い。
 （天和2年（1682）-元禄11年（1698））

館林藩

秋元家の江戸屋敷②

ご清聴ありがとうございました

※表紙の大名屋敷の錦絵、江戸の古地図は国立国会図書館のデジタルコレクションを参照しました。